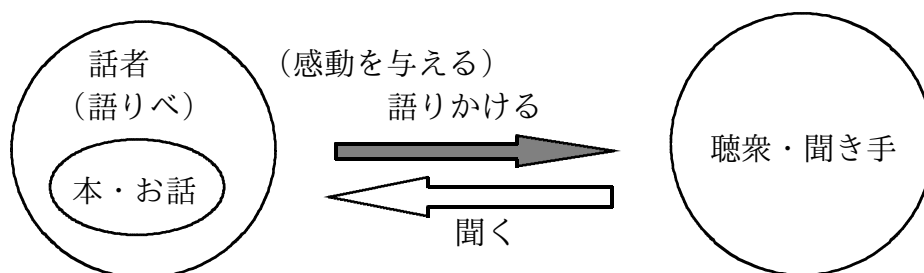
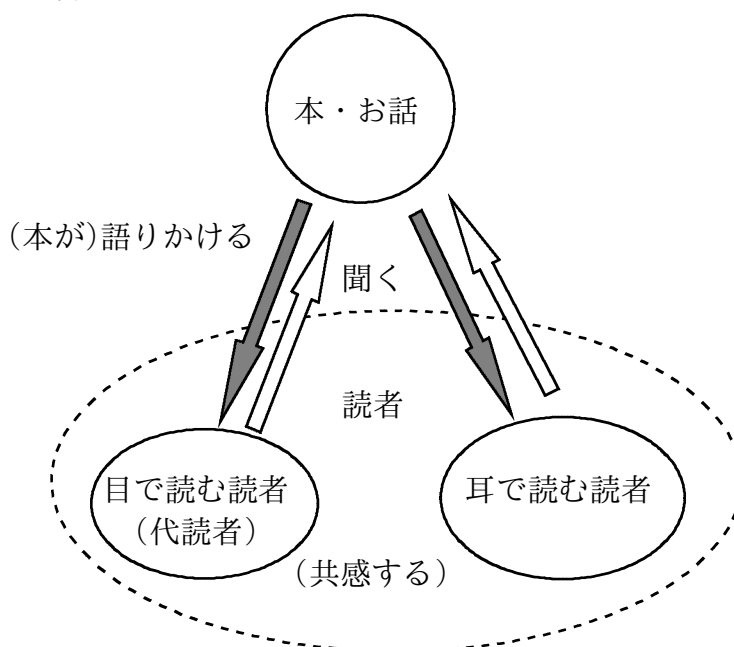


「読み語り」と「朗読・音訳」

一般的な「おはなし・語り・読み語り」の世界



「朗読・音訳」の世界



【特に文芸作品を読むときの注意】

◎朗読者・音訳者は「語りべ（語部）」ではなく「代読者」であることを忘れてはならない。「代読」すなわち「代わりに」読むことであり、「代表して」読むことである。

◎「読み聞かせ」とか「対面朗読」の言葉に惑わされて「読み語り」になってはならない。「気どった」読み、「気負った」読み、「気張った」読みは「聞かせよう」という意識が強いから起こるのである。

◎朗読・音訳は、他人を感動させるために読むのではない。自分が一読者として、作品をどれだけ正確に、かつ深く読み取るかということが、音訳の技術以上に必要である。

朗読者がその作品を深く読み取っていれば、聞く人にも内容が深く伝わる。作品が感動的なものであれば、読み手と聞き手が、その作品を共有して共感する。しかし、それは結果的に起こることであって、読み手が意図すべきものではない。音訳の場合、特にそうである。多くの文章は、読者を感動させることを目的として書かれている訳ではない。